



**木曾谷の歴史からみる  
赤沢の木曾ヒノキ林**

「木曾」 「日本書紀」 神代の巻には、八岐大蛇を退治したスサノオノミコトが「スギとクスノキは舟に、ヒノキは宮殿に、マキは棺に使いなさい。そのためにたくさん木の種をみんなで撒こう。」と言ったと書かれています。このことから、日本人が古代から現代までの長い間、木を利用してきたことがうかがえます。なかでもヒノキは、神社仏閣や城、屋敷などの主要な建築材として多く利用されてきました。

赤沢自然休養林は、全国の他の地域では見られない樹齢三百年をこえる美しい木曾ヒノキ林を形成しています。なぜ、ここには樹齢三百年の木曾ヒノキ林が残っているのでしょうか。それは、建築材として木曾ヒノキを利用してきた木曾谷の歴史を紐解くことで見えてきます。

荘園時代からの約二百五十年間、木曾谷は代々木曾氏が支配していました。しかし一五九〇年、小田原の戦いによって

豊臣秀吉が天下統一を果たすと、秀吉は木曾の山林資源に目をつけ、木曾氏を総州（下総）網戸（あじと）（今の千葉県）に移封し、木曾を豊臣氏の直轄領としました。これは官林のはじまりといわれています。彼は、奈良の大仏殿、聚楽第、大阪城、方広寺、伏見城などの建築材として、木曾山から多量のヒノキの良材を伐出したといわれています。しかしながら秀吉は、統一からたった八年後に亡くなってしまう。すると今度は、天下分け目の関ヶ原の戦いに大勝した徳川家康が、再び木曾を蔵入れ地として直轄領とし、木曾は尾張藩のものとなりました。



徳川家康



豊臣秀吉

江戸城建築を手がけていたこともあり、木曾谷の大部分において、良質なヒノキの抜き伐りが行われることとなりました。強度伐採はその後約百年間つづきましたが、江戸幕府はこれと合わせて厳しい森林保護政策を行うことにより、木曾谷住民による木曾ヒノキなどの伐採の取締りや監視をしました。この政策は「木一本首一つ」といわれるほど厳

しいものでした。こうしてヒノキ林が保護された結果、木曾谷では三百年生のヒノキ林が形成されました。一生懸命ヒノキ林を守ってきた先人たちの思いを、ぜひ赤沢自然休養林に来て感じてください。



ふれあいの道入口周辺

**◇アクセス方法**

（JR）名古屋駅から上松駅まで中央本線特急一時間三十分、上松駅から赤沢自然休養林までバス三十分  
（車）名古屋から中津川ICまで中央道七十キロ、上松まで国道十九号で五十二キロ、赤沢自然休養林まで十五キロ

なお、車での来園の場合、駐車料金が必要となります。



奥千本を鑑賞する一般の方々



自然休養林内を走る森林鉄道